

第17回 日本篆刻家協会役員展 出品目録

会期：令和7年6月28日（土）～ 8月27日（水）

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
1	井谷 五雲	未得君書	待てどもあなたからの手紙が来ない	温庭筠の詩「遐方怨」	常任顧問
2	山下 方亭	漁舟個々輕（他1顆）	—	—	常任顧問
3	尾崎 蒼石	勇猛果敢 處事不疑	勇ましくて力強い / 何事も疑わない	漢書	会長
4	真鍋 井蛙	韋編三絶（他3顆）	学問に熱心なたとえ	「史記」	理事長
5	喜多 芳邑	一聲一曲 歸去漁翁 醉中獨樂	のどかに一曲の舟歌がきこえる / 漁師は家路をたどる / 酒を獨りのみ楽しんでいる	伊達政宗詩句	副理事長
6	黒田 玉洲	剛健篤實 輝光日新 不家食吉 利涉大川	強く健全で篤実であること / 努力の成果が日々新たに現れること / 自分のためだけでなく社会全体のために貢献することが重要 / 大きな挑戦に直面した時こそ果敢に挑むことが重要	「易経」 山天大畜 彖伝	副理事長
7	小 朴 圃	開文酒宴 猷酬無酒令 談笑生清風 掃尽滿天雲	—	大窪詩仏 詩	副理事長
8	酒居 石莊	自彊不息	自分からすすんでつとめ励んで怠らない	易経	顧問
9	多田 龍淵	黄塵逆帽 馬辟易	黄塵がまともから、うつぶしたぼくの帽子に吹きつけ / 馬はたじろぎ身を開く 黄塵逆帽馬辟易 归来下簾臥書空 不知繡鞍萬人立 何如盧郎駕飛鴻	黄庭堅 P.94 黄庭堅 中国詩人選集 二集 （岩波書展）	顧問
10	中島 春緑	壺中天	別天地。別の世界	後漢書	顧問
11	草田 翠苑	君子萬年	聖人君子は万年まで長生きしてほしいと祈る言葉	詩経	代表理事
12	黄 平 齋	懷清白之心行忠正之道 萬般隨縁 貴在心悟 身無遺憾常安枕室有餘閑自煮茶	清廉潔白の心もちて忠直正明の道を行うである / すべてのこと皆縁に従う / 學習最も重要なのは獨立の考えと心の理解である / 遺憾を残ずに安心で眠る餘暇があればお茶を品賞する	<前漢>桓寛の句 禪意自撰句 <北宋>張載の句 <清>趙翼の句	代表理事
13	田中 修文	朝聞夕改	自分の誤りを他人に指摘されたらすぐに改める	「晉書」周處傳	代表理事
14	古溝 幽畦	得一惟清 於萬斯寧	一を得てただ清く 萬においては斯れ寧らか	「樂府」	代表理事
15	渡邊 和琴	千日酒（他1顆）	—	—	代表理事
16	伊佐治 祥雲	勿謂無知 居高聽卑 勿謂何害 積小就大	無知ということなかれ / 高きにおいて卑きにきくを / 何の害ということなかれ / 小をつめば大をなす	張蘊公	名誉理事
17	奥田 晨生	聽雪 耳聞不似 心聞好	雪を聴く / 耳聞は似かず / 心聞の好き 寒夜無風竹有聲 疎々密々透松櫺 耳聞不似心聞好 歇却灯前半卷經 虚堂智愚偈頌聽雪 乙巳春晨生自題	虚堂智愚（禅僧）	名誉理事
18	堤 白遊	居近識遠（他1顆）	—	—	名誉理事
19	保田 昌石	玉燭星雲 三殿曉	君主の徳が玉のようにうるわしくともしびのように天にかがやくこと。 ※三殿は唐の麟遊殿に三面あり故に之を三殿という	趙甌北	名誉理事
20	井後 雅堂	胸中無宿物 臨己秋霜 弥天罪過 借境調心 捐軀濟難 見素抱樸 腐艸無光	心の中にわだかまりが何もない / 己に厳しく、人に優しく / 大罪も真剣に反省すれば善へと繋がる / すぐれた芸術で自分の心を調える / 命をかけて困難から救う / 飾らず、素直な気持ちで生きる / 腐った草に光はない。綺麗なものはいつも汚れたものから生まれる	世説新語 / 菜根譚 / 菜根譚 菜根譚 / 三国志 / 老子 菜根譚	常務理事
21	石原 豊玉	獻壽栢 體露金風 囊中之錐	贈り物ささげ長寿を祝う / 清々しい風景を體いっぱい楽しむことが悟りだ / すぐれた才能をもつ人は平凡な人の中にいてもやがて頭角を表わす	羅隱詩 禪語(碧眼録)・雲門文偃禅師 史記(平原君)	常務理事
22	出田 塘菰	綵巾纏跣幅半斜（他5顆）	—	—	常務理事

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
23	オオ ムラ セツリョウ 大村 雪陵	數峰如騰（他2顆）	峰の数々は青々とした樹木のごとく	陸游「入蜀記」	常務理事
24	キタ ダ セイ ライ 北田 成磊	佛像印（ しょうせいいん 肖生印）	—	—	常務理事
25	クマ モト セキ セイ 熊本 夕生	ばんかきをひとしくす 萬化齊軌	万物の化育すべての方法を同じくす 茫々大造 萬化齊軌 罔悟玄同 競異標旨 平勃運謀黃綺隠几 凡我仰帘 期山期水 地主觀山水 仰尋幽人踪 回沼激中遶 疎竹間修桐 因流轉輕觴 冷風飄落松 時禽吟長澗 萬籟吹連峰	孫統 蘭亭詩	常務理事
26	ゴ トウ コウ タ ロウ 後藤 黄太郎	黄梁之夢	人の富貴や功名が、非常に短くはかない	「枕中記」中国古典小説	常務理事
27	シモ イ ヨウ キン 下井 瑤琴	波羅僧羯諦（他9顆）	—	般若心經 摘 10顆	常務理事
28	セキ ショウヒ 関 青飛	永和九年 恵風和暢 暮春之初 仰觀宇宙之大 悲夫（他6顆）	永和九年 / 恵風 和暢せり / 暮春の初め / 宇宙の大きさを仰ぎみ / 悲しいかな	「蘭亭序」	常務理事
29	ト デ キュウ ロ 戸出 九廬	道在邇 燕處超然	道は遠いところに求めるのではなく身近なところにある / どんな時でも堂々とゆったりと構えている	孟子 / 老子	常務理事
30	ナカ バヤシ チ カゲ 中林 千影	垂楊葉老 黄蜂歸 縹紛壺中 廻風舞	垂楊葉は老い / 黄蜂帰る / 青白色の壺中 / つむじ風に舞う	李賀「残絲曲」	常務理事
31	ナカ ムラ ヨウシュウ 中村 葉舟	尺蠖之屈 龍蛇之蟄	尺取虫が身をちぢませるのは / 竜や蛇が冬ごもりするのは 尺蠖之屈以求信也 龍蛇之蟄以存身也 尺取虫が身をちぢませるのは長く伸びて大きな前進を勝ちとるため / 竜や蛇が土中に冬ごもりするのは身の安全をはかるため	易經	常務理事
32	ハ セ ガ ワ キ カイ 長谷川 帰海	福寿	幸せに長生きする	禪語	常務理事
33	ハ セ ガ ワ タク セキ 長谷川 拓石	方舟衝破 湖波緑 聯騎蹋残 花径紅 七十年間 人換盡 放翁 依旧醉春風	二双並んだ舟は、湖水の緑の波をつき破りながら進み / 連れだつ騎馬は花さく小道に散りしく紅の落花を踏みしだきながらゆく / 70年の間には、ここを訪れる人の顔ぶれもすっかり変わってしまった / 私だけが相も変わらず昔のままに、春風に陶醉している	陸游 字 務観 号 放翁 春遊（七絶）	常務理事
34	ヒガシ オ コウ ガク 東尾 高岳	俊乂密勿 多士寔寧 晉楚更霸 趙魏困横 假途滅虢 踐土會盟 何遵約法 韓弊煩刑	しゆんがいみつふつ 俊乂 密勿して / まこと やす 多士により寔に寧し / 晉楚 こも は は更ごも霸たり / 趙魏は横に困しむ / みち 途を仮 かく りて虢を滅ぼし / せん ど 踐土に会盟す / 何は約法に したが 遵い / 韓は煩刑に弊れたり	千字文	常務理事
35	マツ モト マサ シ 松本 雅至	戰戰兢兢 如臨深淵 如履薄冰 長幸（引首印・陶印）	せんせんきょうきょう しんえん のぞ 戰戰兢兢として / 深淵に臨むが如く / はくひょう 薄氷を ふ 履むが如し / とこ 長しえに幸あれ 戰戰は恐れること。兢兢は戒めること。深い淵に臨んで落ちはしないかと恐れるようであり、薄い氷を踏んで割れて水中に落ちはしないかと恐れるようである。	『詩經』小雅・小旻 戦国古璽の私印に 同じ印文あり	常務理事
36	ヨシ エ スイ コウ 吉江 翠光	如何能享	—	—	常務理事
37	ヨシ ダ ガ フウ 吉田 雅風	視乎冥冥聴乎無聲	見えない形の不见ところを見、声のない声を聞くのが最も大切なことだ。	「莊子」	常務理事
38	ア ダチ リュウセン 足立 瑠泉	適間閭里帰 滅燭憐光満 聖朝無棄物 遠水猶帰壑	たまたま聞か閭里帰るも / 燭を滅しては光を満つるを憐れみ / 聖朝に棄物ナシ / 遠く流れる川さえも谷に帰るといふ	梅堯臣 / 張九齡 禪林句集 / 曹鄴	参事
39	ア ベ ショウ ロ 阿部 祥廬	剛毅木訥（他2顆）	—	—	参事
40	サカ モト シュン カ 坂本 舜華	しし ゆう えん 醞酒有衍 へんとうゆうせん 籩豆有踐 けいていむえん 兄弟無遠	ともに酒を楽しもう / ずらりと料理を並べた / 兄弟たちよそばにおいでよ	詩經 国風	参事
41	タ ダ ミノ リ 多田 稔里	江碧鳥逾白 山青花欲然	こうみどり とりいよ しろ やまあお はな も 江碧にして鳥逾いよ白く / 山青くして花然えんと欲す	絶句 杜甫	参事
42	ホン ゴウ シ コウ 本郷 紫香	永受嘉福	永く嘉福を受く	漢瓦當文	参事
43	マツ モト スイ ジョ 松本 翠女	えっかんせんこう 越管宣毫 はじめてじょうにかない 始稱情 こうせんしじょう 紅箋紙上 かけいをまく 撒花瓊	越の竹で作った筆軸 宣城産の穂 / だからこそ主人が気に入る / 紅の詩箋 / 美しい花を散らしたような文字を書いていた	せつとう 薛濤詩 ふでてをはなれる 筆離手	参事

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
44	アサ ノ コウ ガイ 浅 野 江 涯	有客無酒 有酒無肴 月白風清 如此良夜何	客有れども酒無く / 酒有りとも肴無し / 月白く風清し / 此の良夜を如何せん	宋 蘇軾「後赤壁賦」	理事
45	アゼ ハラ ショウ カ 畔 原 小 華	雨疏風驟	雨がパラパラ降り速い風が吹いた	李清照詞「如夢令」	理事
46	イシ カワ ム ガイ 石 川 無 外	温如瑞玉（他1顆）	—	—	理事
47	イナ ガキ カ セン 稲 垣 華 扇	出寺吟行	寺を出て詩を口ずさむ	張籍詩「逢賈島」	理事
48	イ バ ショウラン 射 場 少 藍	驚心動魄	—	—	理事
49	イマ ムラ トウ ホ 今 村 董 圃	道君諸璽 眞瓊古 襄陽六印出親鐫 請玩哀然眞譜在 當知吾語了非私 看到六朝唐宋妙 居然成譜 意如何	道君徽宗皇帝の諸璽はほんとに美しくて古めかしい / 米芾の六印はみな自らの手で刻したもの / どうかたくさんある真の印譜を玩味してほしい / 私の言葉がついに公平であると知るに違いない / だが六朝や唐宋の印章の妙に目をとめると / 事もあるうに印譜を作ったのはどういう考えか	—	理事
50	エン ドウ ベイ シ ジン 遠 藤 米 子 人	入物無 両手受	入れものがない / 両手で受ける	尾崎放哉の句	理事
51	オオ タ ケイ スイ 大 田 桂 翠	雨聲添好醉 花氣散餘醒	雨の音を聞きながら心地よくなる / 花の香りをかいで酔いを覚ます	陸游詩	理事
52	オカ ザキ ギ セキ 岡 崎 戯 石	靜中觀物化 野寺分晴樹山亭過晚霞春深無客到一路落松花 德不孤必有鄰 養心莫善於寡欲	靜境中に物の変化を見る / 野寺には木々がめにくっきり映え山亭には夕暮れのもやがただよう。このあたり春色深くたずねる人もなく路行けば松花が静かに落ちるのみである / 有徳者には住居に隣家があるように必ずその人を慕い或いは助ける者があるから孤独ではない / 精神修養には欲望の少ないことが一番大切である	—	理事
53	オカ ダ ケイ シュウ 岡 田 桂 舟	南無大師遍照金剛	真言宗呪文	—	理事
54	オ ガミ ギョクカン 小 上 玉 菡	山櫻 如美人 紅顔 易銷歇	(雪如花・雪は花のようである) 山桜は / 美人のようであるが / 美しい顔は / 消え易いものだ 昨日雪如花 明日花如雪 山櫻如美人 紅顔 しょうけつ 易銷歇	鄧尔雅詩「櫻花」	理事
55	オ ガワ ヒ セキ 小 川 匪 石	蛙	無事 カエル 鳥獸戲画 甲巻第17巻より蛙の（肖生印）として作成した（奇声を発するカエル）	鳥獸戲画	理事
56	キン ムラ ソウ フウ 岸 村 爽 風	楓葉荻花秋瑟瑟 拳酒欲飲 醉不成歡 水上琵琶聲 主人忘歸客不発 添酒廻燈	かえで 楓の葉は色づき岸辺の荻の花は白くもの悲しい秋の様子 / 酒杯を挙げて飲もうとする / 酒に酔っても楽しくない / （長江の）水上に琵琶の音が聞こえた / 主人は帰るのを忘れ、旅立つ人も船を出すのをやめた / 酒を添えて どもし 燈を廻らす	白楽天「琵琶行」	理事
57	キ ムラ ヨウ ヨウ 木 村 容 庸	聖人百世之師	聖人は百世の師なり	「孟子」盡心章句下	理事
58	サエ グサ リュウセン 三 枝 龍 泉	大吉祥 鶴壽 祥雲 多福 長安楽 富貴 眉壽 長壽 長楽 延年	非常にめでたいこと / 長生きを祝うことば / めでたい時に現れる雲 / 幸福が多いこと / 長く安楽な生活に居る / 家が富んで身分が高いこと / 眉が長く伸びるまで長生きする人 / 寿命が長いこと。長生き / 長く楽しむこと。いつも楽しいこと / 寿命を延ばす。長生きすること	莊子・人間世 淮南子・説林訓 北周・庾信 / 書経・畢命 論語・里仁 / 論語・顔淵 詩経・豳風・七月 管子・内業 / 韓非子・功名 荀子・致士	理事
59	サ ガ ラク ザン 嵯 峨 洛 山	日利千金（他9顆）	—	—	理事
60	シン オウ 晋 鷗	一蓑煙雨任平生（他6顆）	—	—	理事
61	タケ ウチ リツ ジョ 竹 内 立 女	白髮漸交 還暦壽 古稀獲得 更欣然 齡昇喜米依天恵 遂是歡迎 百歳年	白髪がちらほら交ってきた / 還暦の年 / 70歳まで生きられて / 嬉しい限りである / 喜寿米寿に達するのは天の恵み / 100歳を迎えることができるならば本当に喜ばしい / 100歳	宮崎東明「長壽之詩」	理事

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
62	武田 黎秀 タケ ダ レイ シュウ	令和七年二月 延壽 長生未央 梅華 無私 神和 長寿 有為無常 大富 延年	—	史記、封禪書 王安石 文子、自然 仏語 史記亀筆列伝	理事
63	巽 聖石 タツミ ショウセキ	敬勝百邪 神光靈昭 雅楽感召	敬はもろもろの邪惡に勝つ / 精神の靈光、明らかな心の本体 / 高尚な音楽が人心を感動させる	言志録	理事
64	田原 呉山 タ ハラ ゴ ザン	天覆地載 突梯滑稽 轉禍爲福 無上甚深微妙瀟 朝秦暮楚 剪爪断髮 轉禍爲福	— / 世俗に従ってさからわず、それと共に移り行くこと / 禍わい転じて福となす / — / 朝に秦におり夕方楚にいる。住所の定まらないこと / 殷の湯王がひでりの時に自分を犠牲にして民のために雨ごいした故事(つめを切り、かみをたつ) / 禍わい転じて福となす	— 楚辞・人居 戦国策・燕 — / 史記 十八史略・殷 戦国策・燕	理事
65	寺田 知了 テラ ダ チ リョウ	春眠不覺曉 處々聞啼鳥 夜来風雨聲 花落知多少	春眠曉ヲ覺エズ / 処々啼鳥ヲ聞ク / 夜来風雨の声 / 花落つること知ル多少	「春曉」 孟浩然	理事
66	寺田 濤雲 テラ ダ トウ ウン	知深有術 權變鋒出	—	王充詩「論衡」	理事
67	中本 管城 ナカ モト カン ジョウ	天何言哉 四時行焉 地何言哉 百物生焉 てんなにおいうや しじおこなわれ ちなにおかいうや はくものなる	天語らず地黙すれども四時は運行して誤らず 萬物は休みなく生育する	「論語」	理事
68	庭田 露舟 ニワ タ ロ シュウ	春風南客憶梅花… 月墜西楼夜影空… 乱水東流落照時… … <u>拾薪寒煮澗中氷</u> ※下線部を刻印した	(春の句)春風が吹くころになって南から来た旅人の私は故郷の梅の花を思う / (夏の句)月が西の高殿に傾き空に光が失せるころ / (秋の句)秋の長雨か乱れた川の水が東方に流る夕ぐれ時 / (冬の句)たきぎを拾って澗中の氷をとってこれをたいた	江戸 柴野栗山 晩唐 徐夔 唐 錢起 元 郭鈺	理事
69	畑間 青露 ハタ マ セイ ロ	合斷魂 幸有微吟	まさ たましい た さいわい びぎんあ 合に魂 を 断つべし / 幸 に 微吟有り	林逋詩「山園小梅」	理事
70	花房 浩佳 ハナ フサ コウ ケイ	天祐鼈	雲辺寺の山号巨鼈山に由来し、「天祐」とは、人知を超えたものの助けにより、思いがけず物事が上手くいくの意。天祐之鼈 てんゆう の おおがめ	—	理事
71	早川 聴芬 ハヤ カワ チョウフン	主人不相識 偶坐為林泉 莫謾愁沽酒 <u>囊中自有錢</u> ※下線部を刻印した	この別荘の御主人をもとより存じているわけではないが、 / 突然おしかけて来て御主人と対坐しているのは、このお庭を拝見したいからだ。 / 私が来たからといって、まあそんなに酒を買わねばならぬなどと、とやかく御心配なされるな。 / これでも財布の中にはちゃんと錢をもっておりますわい。	題袁氏別業 賀知章 (袁氏の別業に題す)	理事
72	坂 正歩 バン セイ ホ	墨池幻出 兩琅玕	すみつぼより幻のように現れる / 二本の竹	王鑑詩「竹」	理事
73	福谷 華紅 フク タニ カ コウ	雲霓之望 歸市 者不變	これ雲霓を望む(日照りの時に雲や虹を望む・希望) / 市に歸す / 者は變せず うんげい いち き もの へん	孟子	理事
74	古瀬 章石 フル セ ショウセキ	陽乘陰 陶潛歸去 龍得水	陽氣が陰氣をしのぐ / 陶潛が世俗を嫌い官職を捨てて故郷に帰る / 物がふさわしいところを得る	「淮南氏」「晋書」 「塩鉄論」 刺復	理事
75	古野 燕安 フル ノ エン アン	文是糟粕 文是瓦礫 <u>撻槌一打</u> 三千衆雲集 山霞一咽夕谷神 福者明 時至人叶 渤駄 生死海 (他1顆)	言葉は粕や瓦礫のようなもの。それだけでは意味がない。語り尽くせぬもの / 撻槌一たび打てば三千の衆雲のごとく集まる / タベには山の霞を吸って心を養う / —	空海の言 空海「応鑄造鏡事」 空海「性靈集」 空海の言葉	理事
76	馬 景泉 マ ケイ セン	道法自然 (他15顆)	—	—	理事
77	松本 清苑 マツ モト セイ エン	握錐投斧 照雪聚螢	きり にぎ おの 錐を握り斧を投げ雪に照らし螢を聚む あつ	「顔氏家訓」 勉學	理事
78	松本 艸風 マツ モト ソウ フウ	臨地學書 紈扇圓潔	一生懸命に文字を書く練習をすること / 絹地張りのうちわはまるく清楚でいかにも見た眼にこちよい	王羲之「与人書」 千字文	理事
79	安井 芳泉 ヤス イ ホウ セン	下揚州 孤帆遠影	(黄鶴樓送孟浩然之広陵から抜粋) 故人西辞黄鶴樓 煙花三月下揚州 <u>孤帆遠影</u> 碧空尽 唯見長江天際流	李白 漢詩	理事
80	山本 寿法 ヤマ モト ジュ ホウ	梅花百福兆 疎梅鎖春	雪の中でふくらむ梅華のように厳しい中にたくさん吉兆が隠されている / 早春の様子。梅はまばらに咲いている	禪語 范石湖	理事
81	横井 青蓮 ヨコ イ セイ レン	漠漠秋雲起 自覺衣裳濕	音もなく秋雨が降りつづいている / 夜はうす寒さを感じる	白居易詩 「徹雨夜行」	理事

No.	姓 号	印 文	解 説	出 典	役 職
82	アオ キ ユウザン 青 木 雄 山	好勇過我 無所取材	勇を好むこと我に過ぎたり / 材を取る所なからんと	論語 公治長	参与
83	アキ ヤマ ショウカ 秋 山 捷 華	梅花路近 桃葉波平	道端に咲く梅の花は雪のように美しい / 桃葉の船着き場は静かで渡るに好し	雅琥の対句	参与
84	カワ ク ボ アキラ 川 久 保 明	脩辞立誠（他1顆）	—	—	参与
85	コ マツ ゴ ガク 小 松 五 岳	両人对酌山花開一杯一杯復一杯 我醉欲眠卿且去明朝有意抱琴来	隠者と二人酒を酌み交わす。山の花は満開だ / さあ一杯、そちらも一杯、それではまた一杯 / すっかり酔って眠くなった。君、ここはひとまず帰ってくれ / 明日朝、よかったら琴を持ってまた来てくれ	李白 山中幽人對酌	参与
86	タ ダ ガク ユウ 多 田 學 友	永和九年 一觴一詠 感慨係之矣 固知一死生為虚誕 故列叙時人 亦将有感於斯文	永和九年(西暦353年) / 一杯の酒を飲んでは一詩作ること / それにつれ感慨がもようされるのだ / もとより死と生を同一をみなすのはいつわりであり / それ故にこの時の人々を列举し / きっとこの文に感動するであろう	蘭亭序	参与
87	ツ ダ シュウホウ 津 田 秀 鳳	白蘋千點 紅雨一簾	白いウキクサが沢山咲き すだれの様に雨が花にそそぎ	曹仁虎の詩句	参与
88	ナガ ノ ソウスイ 永 野 草 翠	へん べんたるひ ちょう 翩 翩 飛 鳥	軽やかに空を舞い飛ぶ鳥 翩翩＝軽やかに舞い飛ぶさま	陶淵明 詩	参与
89	フル タ マホル 古 田 衛	開甕忽逢陶謝 花塢樽前微笑	酒甕を開けると陶謝の詩を思わすとき / 花咲く土堤と酒樽を前に微笑むとき	蘇東坡「賞心十六事」	参与
90	オオ ノ ショウザン 大 野 勝 山	雪告豊 愚者一得	大雪が降って今年の豊作を知らせている / 愚かな者でもたまにはすぐれた知恵を発揮する	唐・張説「史記」	評議員
91	カネ コ セイハ 金 子 静 巴	小屋如漁舟 烏銜帨 擬哭塗窮	小屋漁舟の如し/烏の紙を銜む/塗 ふく みち の窮するに 哭せんと擬す	黄州寒食詩卷	評議員
特	バイ ジョ テキ 梅 舒 適	大方無隅 老而彌篤	—		特別展観